

『台湾公論』

1942～45年—植民地総合文化雑誌

監修・解題—河原功（一般財団法人台湾協会参与） 造本—A5・並製・総約4,480頁
 推薦—谷川舜（早稲田大学大学院） 揃価—265,000円（記本毎・別冊分売可）

【第一回配本】2023年5月 配本揃価44,000円 ISBN978-4-910998-06-0

- ・第一巻(360頁) 『台湾公論』7巻1号～7巻5号(台湾公論社、1942年1月～5月)
- ・第二巻(396頁) 『台湾公論』7巻6号～7巻9号(同上、1942年6月～9月)
- ・別冊(80頁)2,000円（別冊のみ分売可） ISBN978-4-910998-07-7
 解題、総目次細目、執筆者名索引

【第二回配本】2023年11月 配本揃価44,000円 ISBN978-4-910998-08-4

- ・第三巻(342頁) 『台湾公論』7巻10号～7巻12号(台湾公論社、1942年10月～12月)
- ・第四巻(384頁) 『台湾公論』8巻1号～8巻3号(同上、1943年1月～3月)

【第三回配本】2024年5月 配本揃価66,000円 ISBN978-4-910998-09-1

- ・第五巻(364頁) 『台湾公論』8巻4号～8巻6号(台湾公論社、1943年4月～6月)
- ・第六巻(332頁) 『台湾公論』8巻7号～8巻9号(同上、1943年7月～9月)
- ・第七巻(394頁) 『台湾公論』8巻10号～8巻12号(同上、1943年10月～12月)

【第四回配本】2024年11月 配本揃価44,000円 ISBN978-4-910998-10-7

- ・第八巻(394頁) 『台湾公論』9巻1号～9巻3号(台湾公論社、1944年1月～3月)
- ・第九巻(380頁) 『台湾公論』9巻4号～9巻6号(同上、1944年4月～6月)

【第五回配本】2025年5月 配本揃価67,000円 ISBN978-4-910998-11-4

- ・第十巻(394頁) 『台湾公論』9巻7号～9巻10号(台湾公論社、1944年7月～10月)
- ・第十一巻(334頁) 『台湾公論』9巻11号～10巻1号(同上、1944年11月～45年1月)
- ・第十二巻(298頁) 『台湾公論』10巻2号～10巻5号(同上、1945年2月～5月)

類縁書のご案内

井川充雄 編・解題
台湾ラジオ資料集
 附、南方軍宣伝報道検閲詳報

【全6巻+別冊】
 A4 / B5 / A5判 並製 総1,174頁 ¥68,000
 2020年刊【編集復刻版】



金沢文圃閣 Kanazawa Bumpokaku 〒920-0867 金沢市長土堀2-16-30
 Tel. 076-261-8884 Fax 233-3111

口書店様へ…ありがとうございます 直接小開までお申し込みください
 ※図版は本書より【一部原紙より編集・加工】 価格は税別 054/06/2000

解題『台湾公論』昭和17年1月号～昭和20年5月号をめぐる

はじめに

- 一、『台湾公論』と『台湾公論』
- 1、発行人「田上忠之」について
 - 2、『台湾公論』の理念
 - 3、『台湾公論』の創刊
 - 4、特色ある『台湾公論』裏表紙—色鮮やかな鳥瞰図
 - 5、株式会社となった台湾公論社

- 三、『台湾公論』各号解説と同誌をめぐる状況
- 1、南方への快進撃を続けていたころの『台湾公論』
 - 2、『台湾公論』、紙面を刷新
 - 3、編集人が小石原勇に交代
 - 4、台湾公論社の規模縮小—支局の廃止、表紙絵の消失
 - 5、丸井砂子の編輯部入社
 - 6、決戦態勢での『台湾公論』
 - 7、出版統制、新聞統合、雑誌統合
 - 8、大幅な減ページとなった『台湾公論』
 - 9、戦時下の日本—その時代背景
 - 10、発行人の交代—田上忠之から古屋貞雄に

四、『台湾公論』の特色

- 1、戦意高揚
- 2、内地との連携

まとめとして



現代社会・文化史資料 17

『台湾公論』

1942～45年—植民地総合文化雑誌

全12巻
 +別冊
 [復刻版]

監修・解題—河原功

『台湾公論』は戦意高揚を煽るという民間発行の総合雑誌であったが、決戦期の台湾社会を理解するに貴重な証言の詰まった、歴史資料である。

執筆者は幅広く、在内地人、台湾人を問わず、台北帝大教授等の教育関係者、総督府関係者、軍関係者、経済界や新聞界に属する人物、文学関係者など、各分野にわたる。また、内地からの寄稿を積極的に受け入れたことで、日本内地で台湾がどのような見られ方をしていたかも理解することができる。

金沢文圃閣

推薦文
植民地台湾の幾重にも屈折した「公論」を示す 谷川舜（たにがわ・しゅん／早稲田大学大学院）

『台湾公論』は日本統治時代の台湾で発行された日本語による総合雑誌である。1936年1月に創刊されたが、今回は対米英開戦から日本敗戦直前までの戦時下発行分が復刻される。いわゆる国民国家の埒外に存在したメディアといえ、植民地統治下/日本語常用下/戦時下という幾重にも屈折した中でどのような「公論」が模索されたか緘く意義は大きい。

『台湾公論』では記者の呉金鍊や作家の呂赫若など台湾人も日本語で執筆し、「山の母を訪ふ記—高砂義勇隊の母を訪ねて—」（1942年12月）や「朝鮮特集」（1943年12月）が企画され、「大東亜人の素描」（1944年1月～同年3月）として「近衛文磨と汪精衛」「東條英機、張惠恵（ママ）、ラウレル」「ピピン、パー・モウ、ポーズ」が並べ論じられた。さらに同社の古屋貞雄（弁護士）は、大久保弘一（陸軍）、藤崎熙（海軍）、栗原広美（現『台湾新報』元『毎日新聞』記者）といった渡台一年に満たない者と「決戦場台湾—われ等何をなすへきか—」（1945年2月）の座談会を開いている。このような編集を行った総合雑誌は我々に何を示すのだろうか。

植民地台湾では総督府がメディアの発行許可を統制していた。だが『台湾公論』は社是で日本精神と国防思想の普及徹底を掲げ、在軍部や在郷軍人の関係者にも早くから紙面を提供した。植民地メディアの議論で見落とされがちな、統治機構の多数を占める

文官とは別様な価値判断のあり方で含んだ「公論」の見取り図を本誌は示してくれるはずだ。

島内日刊紙の漢文欄廃止という日本語への一元化と、ラジオの対外放送や島内第二放送という現地語による多元化の間で、植民地台湾のメディア使用言語は揺れ続けた。帝国の一部であり南進基地とも位置付けられた「台湾」をいかに誌上で展開するか、『台湾公論』が掲載した島内と南支南洋の短信、新聞・ラジオ・文芸といった時評、硬軟にわたる論文や写真は、南方行き/帰りの各界著名人が寄せた記事と相まって、台湾の人材・物資の動員された「大東亜共栄圏」を図らずも側面から照らすものとなっている。

『台湾公論』は国民国家の延長から「皇民化」「奴隸化」「親日」といった形容で単純化されない、予測困難な時代に直面しても形作ろうとした「公論」の限界と可能性を知らしめる。人々の分断が危惧される現代において、公然たる分断がなされた帝国時代に知見を求めるとき、あらゆる分野を抜おうとしたこの総合雑誌が導いてくれるだろう。

しかし、私たちが「我が国」を論じているとき、それは「我が国」を研究することによって、人種・文化・言語の異なる人々の見方は異なる。植民地メディアの議論で見落とされがちな、統治機構の多数を占める



内地作家や報道班員から寄せられた小説や紀行文は、今では得難い貴重な資料/史料となっている。

総目次 <抄録>

台湾の責務を完遂す	長谷川清 (台湾総督)
大東亜戦下の皇民奉公運動	山本眞平 (皇民奉公会事務総長)
(昭和17年全島各旅団三勲章) 皇道義勇隊の功績	高砂義勇隊
本島人の生活改善—身邊の瑣事から始めよ	高砂義勇隊
サア—僕も君も志願しよう—志願兵制度と志願の手続き	高砂義勇隊
二人の志願兵	高砂義勇隊
長唄「サヨンの鐘」—作詞は木村富子文女	高砂義勇隊
シンガポール陥落に際して台湾の重要性加重	高砂義勇隊
在ジャバワ三三年—最後の引揚げ孫氏に話を聴かせよ	高砂義勇隊
志願兵映画について	高砂義勇隊
戦ひはこれからだ！ 島民は経済戦を理解せよ	高砂義勇隊
日記の節—りマレー戦線従軍録音記	高砂義勇隊
台湾に於ける戦時文化方策論	高砂義勇隊
(文芸時評) 趣味雑誌「文芸台湾」の刊行	高砂義勇隊
本島文化宣伝写真に就いて	高砂義勇隊
北部軌道線の雄—桃園軌道の躍進と	高砂義勇隊
民芸！土芸！皇民化への背致をどう裁く？	高砂義勇隊
台湾興行統制会社創立披露特別興行	高砂義勇隊
—高井隆一党—龍寅移動演劇隊各地巡演記	高砂義勇隊
比島に高砂義勇隊を訪ねて	高砂義勇隊
「台湾的」とは	高砂義勇隊
監禁生活 66日の苦惱を語るチモールに留邦人	高砂義勇隊
南方開拓者列伝	高砂義勇隊
(現地報告) 戦線の軍夫	高砂義勇隊

台湾映画界の諸問題—主として興行統制—会社への希望	高砂夫
南方施策上に台湾の経験をどう活かすか	高砂夫
台湾の結婚種々相	高砂夫
台湾野球界の思ひ出	高砂夫
台湾の文化と若き世代	高砂夫
地方より—基隆市への注文帳—神祇教育に留意せよ	高砂夫
台湾楽しや	高砂夫
(隨筆) 小説と雑誌	高砂夫
(創作) 隨筆	高砂夫
(創作) 長軍事郵便	高砂夫
(座談会) 台湾を語る	高砂夫
地方より—在本島人児童教育と基隆の特殊相	高砂夫
須田一二三—陳逢源対談—台湾産業経済を中心として	高砂夫
西川満洲	高砂夫
(戯曲) デング退治 2幕	高砂夫
(座談会) 台湾から見た大東亜共栄圏	高砂夫
台湾外記について—記者の言葉	高砂夫
(隨筆) 台湾女性の服装観	高砂夫
ラジオ時評	高砂夫

戦ふ農村と青年演劇—台北州下芸館競演会を観て	高砂夫
黄得時(興南新聞社文化部次長)	高砂夫
たいわんところどころ—民芸官庁柳宗悦先生に随行して	高砂夫
柳宗悦(東京民芸館長) / 金岡丈夫(台北帝大教授) / 大倉三郎(台湾総督府營繕課長) / 中村哲(台北帝大教授) / 立石鉄臣(画家)	高砂夫
(中堅層に依る座談会) 台湾工業化の諸相を語る	高砂夫
中村金平(台拓企業課長) / 鈴木克英(台電調査課) / 向高祐興(総務局捜査官) / 谷河靖夫(台拓調査課) / 姉齒仁郎(総務局総務課) / 松尾弘(台北高商教授) / 北村柳次郎(三井物産) / 浅田實男(台湾有機合成)	高砂夫
小説総評—昭和十八年上半年の台湾文学	高砂夫
台湾映画界の諸問題—主として興行統制—会社への希望	高砂夫
(対談) 台湾を語る	高砂夫
高砂義の真髓を衝く	高砂夫
台湾新聞統合の動向	高砂夫
台湾の婦女と伝統	高砂夫
大東亜文学者大会に出席して	高砂夫
海軍と台湾青年座談会	高砂夫

(朝鮮特集) 朝鮮の皇民化運動	高砂夫
台湾銀行論 (二) —台湾に於ける国策会社の現状	高砂夫
(隨筆) 台湾ところどころ	高砂夫
志願兵と学徒隊座談会	高砂夫
竹内主計(台湾軍報道部/陸軍中佐(司会)) / 林孝雄(台湾第三部隊/陸軍二等兵) / 高島秀雄(同) / 吉村健作(台湾軍教育隊/陸軍一等兵) / 長澤信夫(同) / 来島三郎(台湾第三部隊/陸軍二等兵) / 竹原宗波(台北帝大医学部) / 島宿秀男(台北帝大付属専門部) / 廣田泰男(台北帝大予科) / 古根慎一(台北師範学校) / 久保弘司(台北高等学校) / 朝岡秀夫(台北第二中学)	高砂夫
台湾銀行論 (二) —台湾に於ける国策会社の現状	高砂夫
(隨筆) 台湾ところどころ	高砂夫
増産と文学	高砂夫
(神兵に誓ふ—職域を通じて) 人の和と新新聞の使命	高砂夫
農婦われ	高砂夫
(座談会) 戦場生活と思想動員	高砂夫
土井美奈(台北市長) / 陳逢源(台湾信託会社支配人) / 大田修吉(総務府防空課長) / 栗原広美(台湾新報社政治部長) / 衛藤大(台湾食糧営団米穀課長) / 宮崎直勝(台北州産業部長) / 古屋貞雄(社長(本社側))	高砂夫
(小説) 通り雨	高砂夫
(座談会) 決戦第四年に処する台湾の課題—新生台湾の胎動	高砂夫
林熊次 / 陳斯 / 淡野安太郎 / 山本淺太郎 / 古屋貞雄 / 辜振甫 / 鈴木平八	高砂夫
(小説) 台湾少女	高砂夫
(朝鮮特集) 転換期に立つ朝鮮統治—躍進半島の現勢	高砂夫
石田儀(読売新聞京城支局長)	高砂夫